



# 信州大学理学部同窓会

会報 35 号

信州大学理学部同窓会  
発行日：2020（令和2）年2月29日  
発行責任者：森 淳  
松本市旭 3-1-1 信州大学理学部内  
E-mail：rigakudou@shinshu-u.ac.jp

## 大学で何を学ぶのか — 「指示待ち」から「自主的学び」へ

理学部長（2017～2019年度）市野 隆雄

卒業生、修了生のみなさん、ご卒業、ご修了おめでとうございます。今後、新しい場でのみなさんの活躍に期待しています。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。これから、美しい松本の地で、多様な人たちとの出会いを楽しんでください。

さて、大学で学ぶことの意味について、スピードスケートの小平奈緒さんとフィギュアスケートのネイサン・チェンさんがインタビューに答えていたので紹介します。

信州大学教育学部出身の小平さんは2018年のピョンチャンオリンピックで金メダルをとりました。それは、「信州大学に進学したことが遠回りになった」という意味で「遠回りの金メダル」と評されました。なぜ実業団からの誘いを断り、信州大学で競技を続ける道を選んだのですか、という質問に彼女はこう答えています。

「もちろん実業団はスケートに集中できて、魅力的です。収入もあります。でも、そうした枠の中では自分は成長できない、と思いました。何年後かの自分を想像して、伸び続けられているのかを考えました。スケート以外の人との出会いや経験を通して、もっと人間としての幅を広げたいとの思いもあった。世間の時間軸で見ると、遠回りに見えるかもしれませんが。客観的に自分を見ても、近道ではなかったと感じます」（2018年3月30日朝日新聞デジタル）

ネイサン・チェンさんは、現在、米イェール大学で寮生活をおくる20歳で、将来は医学大学院に入ることを目指しています。彼は、大学入学後に出場したすべての大会で優勝しており、12月のフィギュアスケート・グランプリファイナルでもオリンピック2連覇の羽生結弦選手をおさえて優勝しました。そのあとのインタビューから、少し長いですが引用します。

「イェール大学で勉強ををはじめてから、新しい世界が開けました。世の中はスケートが全てではないという当たり前の現実を実感し、気持ちが楽になった部分もあります。学生のおよそ80%は

フィギュアスケートがどういうスポーツなのか全く知らない。当然僕のこと知らないし、オリンピックを連覇したあのユヅのことすら知らない学生も多い。

世の中にはスケートよりももっと重要なことに取り組んで、大変な苦労を日々している人も大勢いるという現実を改めて実感したんです。自分ももっと人間的に幅広く成長したい。そして将来的には、広い意味で社会に貢献したいという気持ちを持つようになりました。

11月に行われたフランス杯の2週間後にあった大学のテストは、何とかパスできました。今度もまた大きな試験があるのですが、まあなんとかかなるだろうと思ってます（笑）。子供の頃から僕は勉強よりはトレーニングに多くの時間を費やしてきたので、大学の授業はスケートよりもはるかに大変です。

しかし、僕の同級生も大学のスポーツチームに入っていたり、環境問題に取り組む団体に所属していたり、結構みんな勉強以外の活動で忙しい。みんな学業とそれ以外の活動とを両立させている。僕だけがそれほど特別な立場にいる訳ではないので、頑張らなくてはいけません。」（2020年1月10日文藝春秋 digital）

小平さんもチェンさんも、「もっと人間としての幅を広げたい（から大学へ入った）」と語っています。「子供の頃から勉強よりはトレーニングに多くの時間を費やしてきた」というチェンさんは、「狭かった」自分から「より幅広い」自分へと大学に入ってから脱皮した、ということですね。

いま信州大学理学部で学んでいる若い人たちの中にも、「子供の頃から・・・に多くの時間を費やしてきた」という人はいると思います。

私が、家族で米国に滞在していた時、小学校の先生が何かにつけて“if you'd like to do so,”と話すのが印象的でした。学校では「あなたがそうしたいのなら」という自主性が常に問われていたのです。ひるがえって日本の現状はどうでしょう。

最近、あるベテランの「家庭教師集団」の代表が、「中学受験で難関校に入ったのに、入学後数ヶ月でズルズルと成績が下がってしまう子」がいることについて、「塾や親からの指示にしたがって勉強を進めてきた『いい子』にとって、中学では細かい指示がないため、何をすればいいかわからず途方に暮れる」ことが原因の一つだと述べています。（2020年1月24日プレジデント・オンライン）

この話は、「中学の話であって大学には無縁」とは言い切れないと感じています。小中高生の時代に、「・・・に多くの時間を費やしてきた」人々。それが“Because I'd like to do so,”であったのなら問題はありませぬ。しかし、それが誰か（先生や親？）の指示に従ったことだったのだとしたら・・・。

大学で何を学ぶのか？ それは、そのような自分から脱皮することだと思います。言い換えれば、「指示待ち」から「自主的学び」へと自分が変わっていくことです。そのような学びを可能にするために、大学は昔から「自主的な学びの場」を提供し続けています。その中心は、卒業研究であり、セミナー（あるいはゼミ）です。そこでは教員は指示を与えるだけでなく、本人の自主的な学びを支援します。

一方、小平さんやチェンさんのように、より広い世界の中で自分を捉え直すことも、大学で学ぶ重要な意味です。大学は「自分を客観的に見つめ直す場所」でもあるのです。

私自身は学部時代（特に1、2年生時）には、あまり「お勉強」をしませんでした。それは、教科書に書かれている内容を聞くだけの講義には興味を持てなかったからです。もっぱら「山登りに

多くの時間を費やして」きました。しかし、自分が面白いと思う「勉学」には熱心に取り組みました。例えば、自分たちで選んだ学術書を読む「自主ゼミ」を企画したり、塾講師として中学生を相手に「仮説実験授業（生徒が実験の結果について、いろいろな予想を立て、意見をたたかわせた後、実験を行う授業）」をやったり、です。そしてその後、卒業研究には全力を注ぎました。

今、卒業研究が始まると「細かい指示がない」ことに戸惑い、行き詰まってしまう学生がいます。現在の大学では、1、2年生の段階で、少しずつ自主性が身についていくような教育を行うことが大事だと感じます。「答えがわかっていることを教える授業」ではなく「答えがわからない問題について学生といっしょに考える授業」を、「難しい内容に挑戦させるだけの授業」ではなく、「知らなかったことを知る喜びを共有する授業」を、です。そんな学びの中から学生のみなさん一人一人が「自主的な学び」を体得していくことを願っています。

理学部では2019年度に教員間で授業を相互参観する試みを始めました。私が参観した授業の中でも、上のような学生の自主性をはぐくむ取り組みがあることをお伝えします。理学部での授業は、社会人への「市民開放授業（聴講料が必要でず）」、および10月初旬のみ行われる「高校生のための授業公開」により、学生以外の方にも参加していただけます。同窓会会員のみなさまも、ぜひどうぞ。

最後になりましたが、同窓会会員のみなさま方には、私が学部長職であった3年間、さまざまなご支援をいただき、ありがとうございました。どうか今後とも理学部の維持発展に一層のご協力をよろしく願いいたします。

---

## 学 長 挨拶

濱田 州博

日頃より信州大学理学部同窓会の皆様には、一方ならぬご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。まずは厚くお礼を申し上げます。本年もよろしく願い申し上げます。

はじめに、昨年実施しました信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年記念事業に関しまして、報告させていただきます。2019年（令和元年）6月1日（土）に、まつもと市民芸術館において、記念式典、市民公開講座、信州大学歌完成披露コンサート（<https://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/media/movie/2019/06/6170.html>）を行いました。また、同

日ホテルブエナビスタにおいて記念祝賀会を開催しました。記念式典では、池上 彰氏に対する名誉博士号の授与や「信州の高等教育黎明期」に関するトークセッション、信州大学ビジョン2030の発表も行いました。その他に、信州大学歴史資料アーカイブの映像制作をはじめ、各学部等の企画によるシンポジウム、講演会、ホームカミングデー等の記念行事の開催、広報誌「信大NOW」特別号の発行、周年事業専用のホームページ開設、「信州大学歌」の制定、信州大学同窓会連合会による松高・信大寮歌祭の開催、信州大学見本市の開催、信州大学学士山岳